

# 地域 コミュニティの 防災力

重川 希志依

連載 第3回



重川 希志依

来年の1月17日、阪神・淡路大震災の発生から15年目を迎えます。この震災で私たちは数え切れないくらい多くの教訓を胸に刻み込みました。とりわけ、一人ひとりの市民の自助と、人と人が助け合う共助の力が、人命を救い、その後の被災地の復旧・復興にとって最も大きな役割を果たすことを改めて思い知りました。

当時小学生や中学生だった子どもたちは、いまや立派な社会人となりました。震災から4年目の冬に、被災した子どもたちが書いた作文からは、昨日のことのようにあの日の体験がつづられています。15年という時が経過しても、あの時被災地にいた人たちにとって、震災の記憶が風化することはありません。震災後に書かれた子どもたちの作文や、被災者の言葉には、私たちが学ぶべき教訓があふれています。

## 1 1995年1月17日 午前5時46分・・・

崩れた家の中、へしゃげた窓と網戸のわずかな隙間から母親にひきずりだされ、屋根伝いに逃げて、かろうじて道路に飛び降りる事ができた。裸足のままで。そのとき父は、まだ倒れた

# 地域コミュニティの 防災力 重川 希志依

家具の下じきで足だけが見えていた。父が下じきになり支えてくれたので屋根が私のベッドを押しつぶす事はなかった。通りすがりの人や隣の人が危険を省みず、瓦れきの中に飛び込み、必死の思いで父を助けだしてくれた。フラフラと出てきた父を見た時、思わず私は泣きだして膝がガクガクして座りこんでしまった。

「私にとっての阪神大震災」（当時小学校3年生）

いつも母たちは、家に物をとりに行った。子どもたちはいつも留守番で、いつ余震があるか、こわくてかたまっていた。少し音があると、こわくてびくびくふるえていた。母が帰ってくると安心だった。幼稚園に行くのも学校に行くようになってからも泣いていた。送りむかえも大変で、母はつかれていた。父は首のけがをなおしてもらうため、となりの接こついんに行っていた。けがはなおったけど、家はたたないので、まだ、元の場所でくらすせない。

「ふるえがとまらない」（震災当時5歳）

私は、地震のときの事は、思い出したくないです。あの嫌な思いは、二度としたくないのです。この作文を書くことで、又、つらい日々の事を思い出して暗い暗い気持ちになりました。皆、地震からずっと暗い気持ちを心のどこかに持ち続けていると思います。

「震災をのりこえて」（当時小学校3年生）

## 2 揺れがおさまる・・・ 「助けられる側」から「助ける側」へ

突然の大地震、揺れがおさまった後には、突然と立ちすくむ被災者がたくさんいました。何

をすればよいのか分からない、ただただ助けを待つ被災者たち。その時地域のリーダーが声をかけ、指示を出してくれた事でたくさんの人たちが救助活動や初期消火活動に手を貸してくれました。

「俺は被災者やから、人を助ける立場じゃないわって思いましたね。めっちゃ自分勝手なんですけど。どっかから絶対助けがすぐ来るって思うじゃないですか。ほんと、呆然とするしかなかったんです。夜が明けて自分の壊れた家を見とって誰も来てくれないし、ああそうか、自分でやらなあかんのかと思って。」（被災した大学生の言葉）

一方、地域のリーダーは次のように語っています。

「呼びかけたら皆、来てくれますな。呼びかけるまではじっと見てるだけ。その言葉を待ってるゆう感じがしたな。」

## 3 苦しい避難生活のなかで

避難所で、壊れかけた自宅で、親戚の家で、被災者たちの苦しい避難生活が続きました。その苦しさをのりこえるためには「ほんのちょっとした思いやり」と「人のために何かをしてくれる人たちの存在」が大きな力となりました。

「避難させてもらった教会の木目の壁とステンドグラスは被災者にやさしかった」。

「自分の妻を亡くしても地震の後、給水活動に1ヶ月間走り回った。美談とはいわれなくな

い。」(消防団員の言葉)

一生懸命やってくれた人ほど「もっと何かできたのに」と言い、一方で、「してもらって当たり前」と思う人もいた。(避難所運営のリーダーの言葉)

## 4 行政といがみ合っても何も生まれてこなかった

同じ被災者が同情したくなるくらい責められた行政と、責めた被災者がいました。被災者の目にもあまるような被災者もいました。行政が地震を起こしたわけではないのにと、肩を持ちたくなるほど怒る被災者がいました。(被災者の言葉)

しかし行政にも、もう一度考え直さなければならぬ問題があります。

「被災者に対する口のききかた一つで、相手の絶望感を和らげる事ができるのに。それは制度や装備を改めるより大きな意味があると思った。」(被災者が感じた行政対応への不満)

「行政は地域住民をいかに効率よくサポートするかに徹してくれればよい。そのために必要な広範囲な物流の確保とか治安の維持とか、情報の提供をしてほしかった。」(被災者が感じた行政対応への要望)

## 5 かけがえのない“いのち”

自分と家族のかけがえのない「いのち」を守るために最も大切だったことは、わが家を地震に強くし、家具などをきちんと固定しておくことでした。あの地震で家族を亡くされた被災者

から繰り返し聞いたのは、日ごろの備えがなければ家族の生命は救えなかったという重い事実です。

「倒れてきたタンスの門で頭を打ち、頭蓋骨骨折。2週間集中治療を受けましたが、結局ダメでした。」(家族を亡くした被災者の言葉)

「若い人を亡くした家族はあきらめきれないんです。人工呼吸の仕方を教えてくれと言われて、お父さんが遺体安置所で一人、心肺蘇生を続けてました。」(病院の医師の言葉)

「もう神戸に地震は来んでいわれてるけど、洋服たんすなんかは皆捨てました。押入れにパイプを通してそこに服を吊っています。」

「被害を受けてない人ほど「地震対策は役にたたない」といいますなあ。」  
(共に地震により家族を亡くした被災者の言葉)

震災から10年目に、神戸市が市民とともに検証した生活再建の実態調査では、被災した方たちがくらしの再建にとって最も重要だと感じていたのは「人と人とのつながり」でした。それは、金銭的な支援や物理的な復興の重要性をはるかに上回っていました。どのような種類の災害がどこの地域で起こっても、「人と人とのつながり」が被災者を支える基本であることに変わりはありません。

参考資料：阪神・淡路大震災 神戸の生活再建・5年の記録 (神戸市生活再建本部)